

社会を明るくする運動

明るい町づくりは 心と心の ふれあいから



＜昨年の青少年キャンプ大会から＞

身体障害者に学ぶ

日置中 折井伸行



明るく住みよい町・楽しい町づくりは町民みんなの願いでしょう。しかしながら、近年の社会情勢にはさまざまな問題がおこっています。青少年の非行・校内暴力や老人問題・障害者問題等さまざまですが、私達はこれらの問題に對しどのような取組みをしたらよいのでしょうか。それには、色々な手段があるでしょう。しかし、最も大切なことは人と人との心のふれあいではないでしょうか。家庭内での親子のふれあい、学校・職場、地域のひととの心のふれあいこそ、問題解決の原点ではないでしょうか。「社会を明るくする運動」によせて書いていただいた中学校生徒の作文の中から三点を掲載させていただきます。

片足の河瀬君がスタート台に立つと、会場にいるみんなが彼をじっと見つめていました。でも河瀬君は、そんな人の目は何の気にもしません。ピストルが鳴りひびくと、片足でおもいきりふみこんで一生けんめい泳いで行きました。ぼくは、そんな河瀬君を見て「河

瀬君がんばれ。みんなに負けるな。速く速く」と、祈りながら手がいたくなるほど拍手をしていました。結果は、九人中八位でした。しかし、順位はどうあれ、この時ほど河瀬君が大きく見えたことはありません。片足しかない河瀬君にしてみれば、がんばって果てまで行き、その果てでも両足ある人より人でもぬければ、それで十分だと思います。

河瀬君は小学五年生。ぼくといっしょに黄波戸水泳スポーツ少年団に入っていて、雨の日にもぼくたちと同じように、つらいきびしい練習をしてきました。その頃のぼくの気持ちの中には、片足しかないのだから無理をしなくてもとか、水泳をやるだけでも十分だと、単なる同情の気持ちしか持っていなかった様な気がします。でも両足ついているぼくたちと練習量は同じでも、片足しかない河瀬君の努力と苦しみは、ぼくたちの練習のつらさ、きびしさの、二倍三倍にもなつただろうと思うのです。

今では河瀬君は、ぎ足をつけて自転車に乗るようになっていきました。でも、まだ乗り始めの頃は、練習をしてはこぼび、一本しかない足が黒じだらけになったそうです。親から、「足の骨が折れるといけないから、もうやめなさい」と言われても「いたくない」と言って、何回も練習を続けて乗れる

ようになるまで普通の人の何倍も時間がかかると思います。でも彼は、仲間のみんなと同じことをやりぬこうと努力します。それには、ぼくたち以上の苦しみと勇気と根性がなければ出来ません。河瀬君が普通の人と違うところは、ただ片足がないということだけです。しかし、彼の気持ちという面では、ぼく達のと違っていとおぼない強さがあると思います。もし、ぼくの片足がなくなつたらどうなるだろうか。とても河瀬君のように、明るく元気でたくましい心と体を持つことが出来ないだろうと思います。河瀬君は、どちらかと言えば気が弱く、片足はなくても、水泳だって自転車だって勇気を持っては何でも出来るんだ」ということを教えてくれたような気がします。

二十年前のサリドマイド禍で、日本では三百九人ものが被害を受けているそうです。その中の一人、辻典子さんは、「障害はあるけれど、私は当たり前のことをしている普通の女の子なのに、特別なことをしているように見られるのが負担です」と、テレビで言っているのを聞きました。サリドマイドの被害を受けた人は、罪もないのに生まれた時から手などがなくなつたりして、足で何もかもしなくてはなりません。足で字を書いたり、足で食事をしたりすると、ほかの人から特別な目で見られると思います。しかし、障害のある人達だれでも特別な目で見られると、とてもいやな気持ちになることを始めて知りました。